

3 動物形土製品について

KH-14の覆土中から出土した動物形土製品は部分的に欠損しているものの、全体の形状を知ることができ、いくつかの特徴から、動物の種類も推定することができる。以下、いくつかの点について説明する。

出土状況 KH-14の北西隅、覆土の上位から出土した。発見と同時に取り上げてしまったため、詳細な出土状況は不明であるが、大きく二つに割れた状態であったらしい。また、胴部発見後、その周囲から左右の胸びれが出土した。当初より割れ、いくつかの破片になっていたものと思われる。KH-14の覆土中からはこの土製品のほか多数の遺物が出土している。覆土の出土遺物総数は12,151点、土器2,009点、石器84点、剝片類10,054点、土・石製品4点である。土器は2個体のミニチュア土器を含めて15個体が復元できた。時期は縄文時代中期中葉、Ⅲ群A₃類土器である。出土遺物中最も多い剝片類の大部分は北側の二か所のブロックから出土したもので、めのう質頁岩のやり先またはナイフを製作した際のものである。やり先またはナイフの破損品も同時に8個体出土し、剝片と共に投棄された可能性がある。

KH-14の覆土の土器・石器などは、量の多さとその出土状況などからみて、住居廃絶後の凹みに投棄されたものと考えられ、動物形土製品も同様とみられる。

土製品の大きさ・特徴 部 分的に欠損しているが、全体の形状は復元することができる(図V-4)。大きさは長さ6.3cm、幅3.9cm、高さ2.9cm、重さは22.0g(復元後)である。欠損しているのは右胸びれのつけ根および右尾びれ、破損しているのは左右の胸びれと胴部の中央である。割れ口、表面はかなりもろい状態であったので、水洗、乾燥後、5~10%程度のパラロイドB72液を全体に塗布した後、接合、復元を行った。

全体の形状は流線形に近いが、胴部が膨らんでいる。上方からみた場合、左右対称ではなく、左側が直線的であるのに対し、右側はやや膨らみをもち、全体に左側にわずかに曲がっている感じがする。従って、左右の胸びれの状態が少し異っている。また、欠損しているが、尾びれの状態も異っている可能性がある。

頭部は丸味のある三角形で、左右の目は長さ4mm、幅1.5mm、深さ2mmの凹みで表現されている。口は長さ1cm、幅2mm、深さ5mmで、横方向に切られている。さらに目の後ろ6mmのところに長さ2mm、幅1.5mm、深さ2mmの噴気孔とみられる凹みがある。

背びれはつけ根部分で幅1.3cm、厚さ6mm、高さは1cmで、噴気孔の後ろに鋭角的に作られている。また、そのつけ根に長さ1.4cm、幅2mm、深さ2mmの横一文字の沈線があるが、何を表現しているかは不明である。

胸びれは胴部のほぼ中央に水平に付いているが、左側に比べ右側がわずかに開き気味である。

尾びれは胸びれ同様水平に付いているが、小さい。

胎土は砂礫を含み、良好とはいえない。また、焼成は比較的良好であるが、胴部中央の破損部分は非常にもろかった。表面は縦方向に丁寧に研磨されているが、部分的に剥落している(図V-4トーン部分)。色調は黒褐色で、左尾びれの部分だけが橙色を呈している。二次的な変色ではなく、焼成時からのものとみられる。また、赤色顔料などの塗布は全く

住居廃絶後
の投棄

胴 部

頭 部

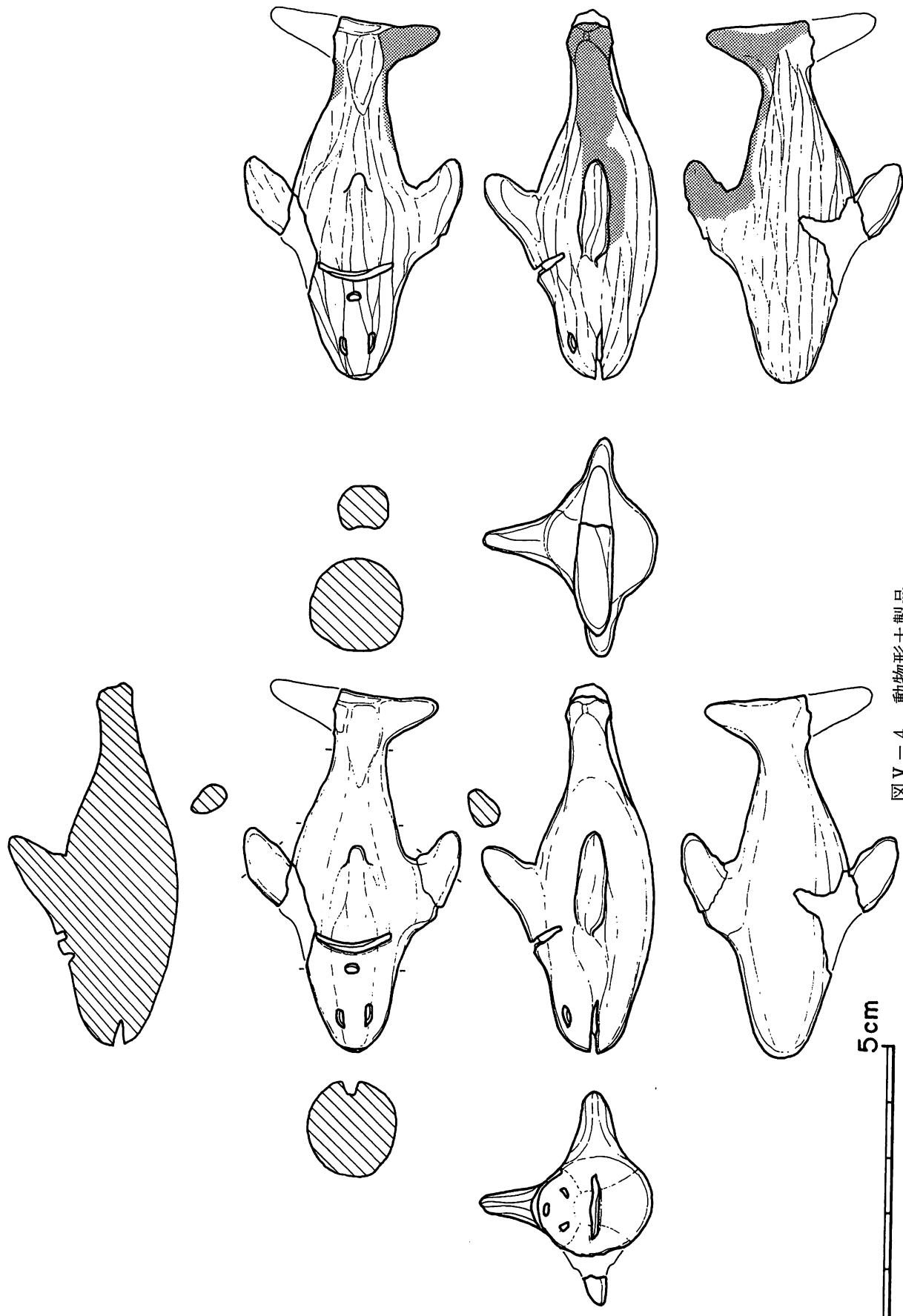
背びれ

胸びれ

尾びれ

図 V-4 動物形土製品

0 5cm



みられない。胎土、焼成、調整などの特徴は、縄文時代中期中葉Ⅲ群 A₃類土器（サイベ沢VII式相当）と酷似している。出土状況と前述の特徴から、土製品は縄文時代中期中葉の時 所属時期期と考えられる。

想定される動物 全体の形状は魚に近く、鋭角的に立っている背びれはサメを連想させる。しかし、尾びれが胴体に対して水平に付いている点から、魚類ではなく、水生哺乳類の鯨類と考えられる。

鯨類は大きくひげ鯨目と歯鯨目に分かれるが、ひげ鯨目はシロナガスクジラなどに代表されるように大型のものが多く、背びれは非常に小さい。土製品に類似したものは全くみられない。粕谷俊雄氏によれば、歯鯨目には、マッコウクジラ科、アカボウクジラ科、イッカク科、マイルカ科、カワイルカ科の31属65種があるが、日本近海では23属29種が知られる（粕谷 1980a）。それらのうち、土製品と類似点がみられるのは、マイルカ科のもので、以下、粕谷氏による「日本近海のイルカの識別法」（粕谷 1980b）を参考に、土製品の種類を検討したい（図V-5）。

識別は背びれの形状、くちばしの有無などが有力な手がかりとみられる。従って、背びれのないAはまず除外される。次に背びれの形状であるが、鋭角的に立っている点から、山形のB、Dの13、小さいDの14、15などが除外される。次はくちばしであるが、土製品には全くみられない。従って、Cの中で残るのは比較的短い6のカマイルカである。残った6カマイルカと16シャチはいずれも背びれが大きく、くちばしがなく土製品に酷似している。しかし、胸びれの形状を比較するとカマイルカはカマ形で、シャチは丸味があり大きい。土製品の胸びれは、実物と位置がやや異なるが、丸味があり大きい。以上の状況から、土製品はシャチを模したものと考えられる。現生のイルカ類を数多く見ている粕谷氏からもシャチが最も似ている、との見解をいただいた。

シャチ マイルカ科に属し、英語で Killer Whale, 学名 *Ovinus orca*, 別名サカマタと呼ばれ、体長は6~8 m, 主に温帯~寒冷域の沿岸~外洋に生息し、数~数十頭の群をなしている（粕谷 1980a·b）。食べ物は小さな魚や無脊椎動物から大きな鯨まで幅広いが、大半は魚とイカで、食物連鎖の頂点に位置するという。また、サメなどとは異なり、人間には直接害をあたえないらしい（K. バルカム 1986）。

類例（図V-6） 縄文時代の遺物の中には類例はみあたらない。時代は新しくなるが、オホツク文化の遺物の中にはクジラやイルカのレリーフがみられる角器（1, 2）（利尻町亦稚貝塚・岡田ほか 1978），クジラが線刻された針入れ（5~10）（樺太鈴谷貝塚・坪井 1908（5, 6），根室市弁天島貝塚・伊藤 1935・八幡 1943（7, 8），同市トーサムポロ・北構・須見 1953（9），礼文町香深井A遺跡・大場・大井編 1981（10）），「シャチクジラ」と報告されている牙製品（3, 4）（湧別町川西遺跡・米村 1961・大塚 1968（3, 4））などがみられる。しかし、本土製品のようにシャチの全体を表現した造形はない。

民族資料としては、ギリヤークの魔除け（図V-7-1, 2）（加藤 1986），ウィルタのお守り（図V-7-4）（アイヌ民族博物館 1987），アイヌの豊漁祈願具（イノカ）（図V-7-3）（北海道開拓記念館 1972）などにシャチを表現した木製の造形があり、土製品との関連性がうかがわれる。

発見の意義と性格 明確にシャチとわかる土製品としては初出であろう。また、他の材質のものを含めても、これほど写実的なシャチの造形はみられない。縄文時代における動物

鯨類

マイルカ科

カマイルカ
とシャチ

シャチの特徴

亦稚
鈴谷
弁天島
トーサムポロ香深井A
川西
ギリヤーク
・ウィルタ

A 背びれのないイルカ

1. セミイルカ

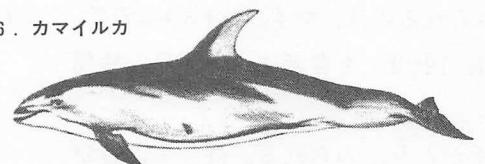


2. スナメリ

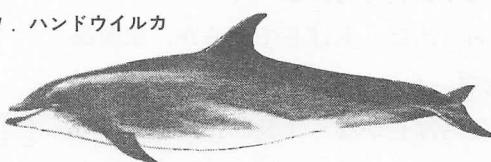


C 背びれが三日月型のイルカ

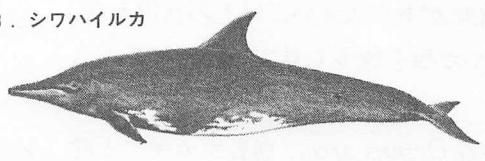
6. カマイルカ



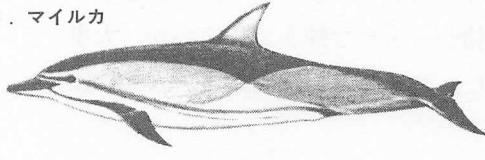
7. ハンドウイルカ



8. シワハイルカ



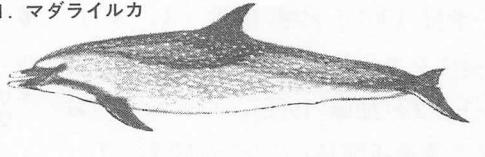
9. マイルカ



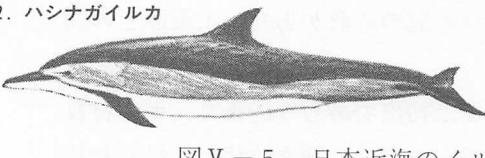
10. スジイルカ



11. マダライルカ

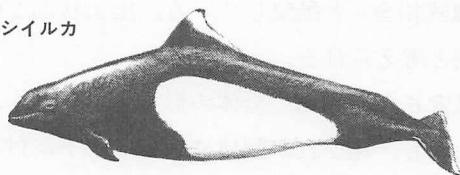


12. ハシナガイルカ

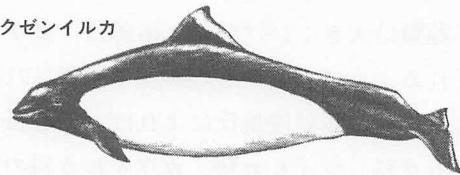


B 背びれは山形で、くちばしのないイルカ

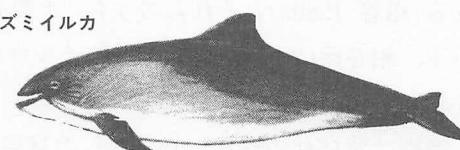
3. イシイルカ



4. リクゼンイルカ

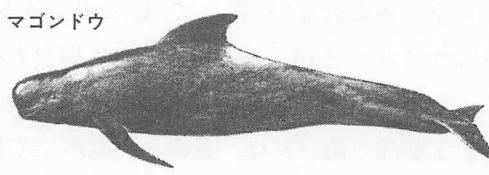


5. ネズミイルカ

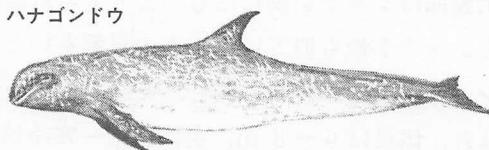


D ゴンドウクジラ型（大型種）

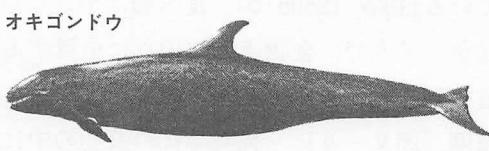
13. マゴンドウ



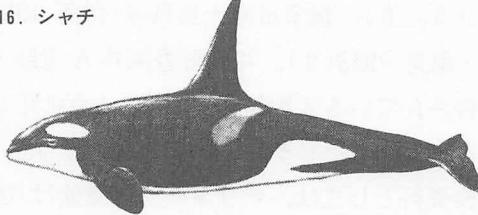
14. ハナゴンドウ



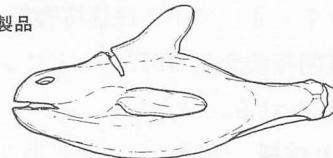
15. オキゴンドウ



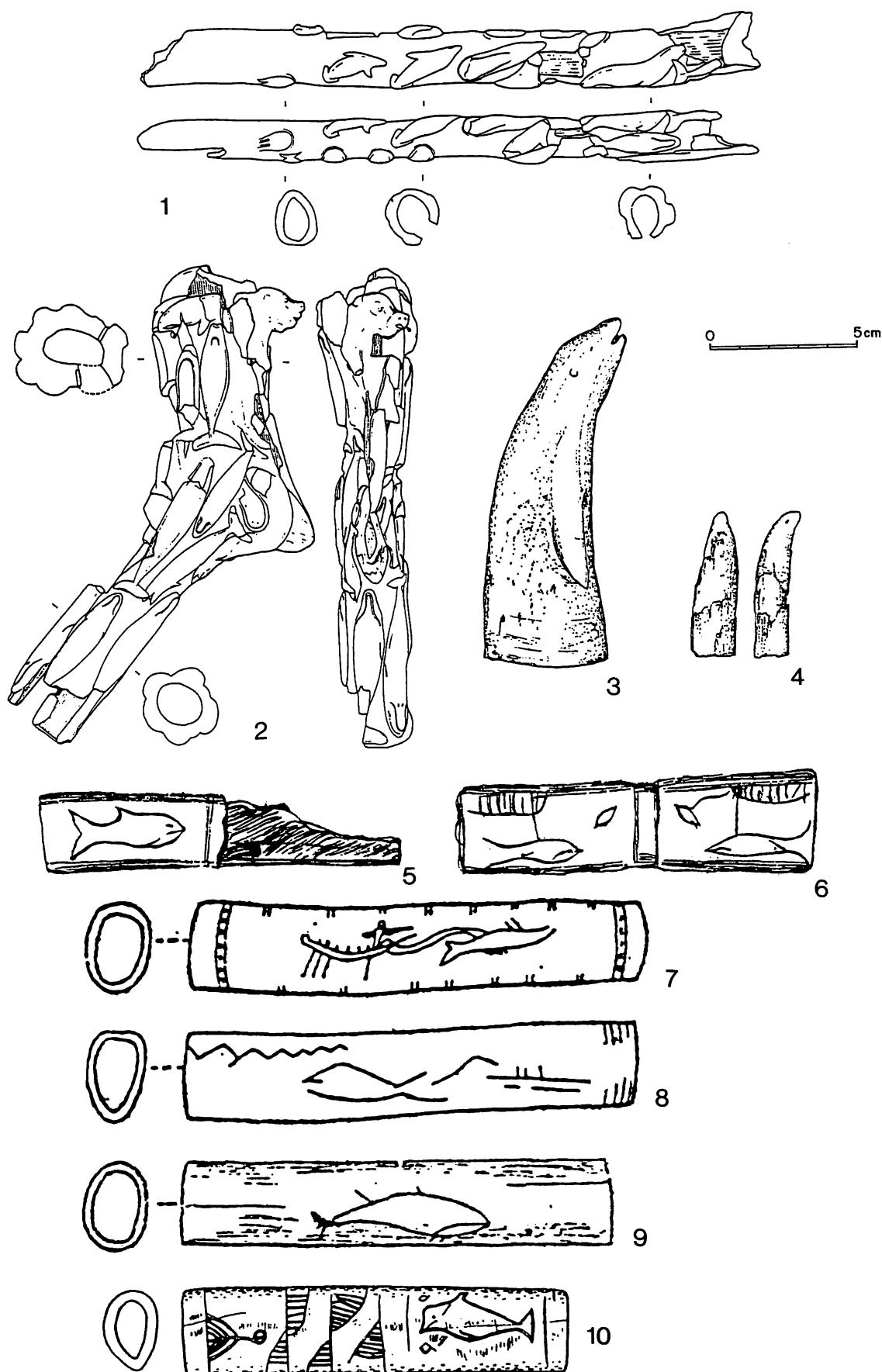
16. シャチ



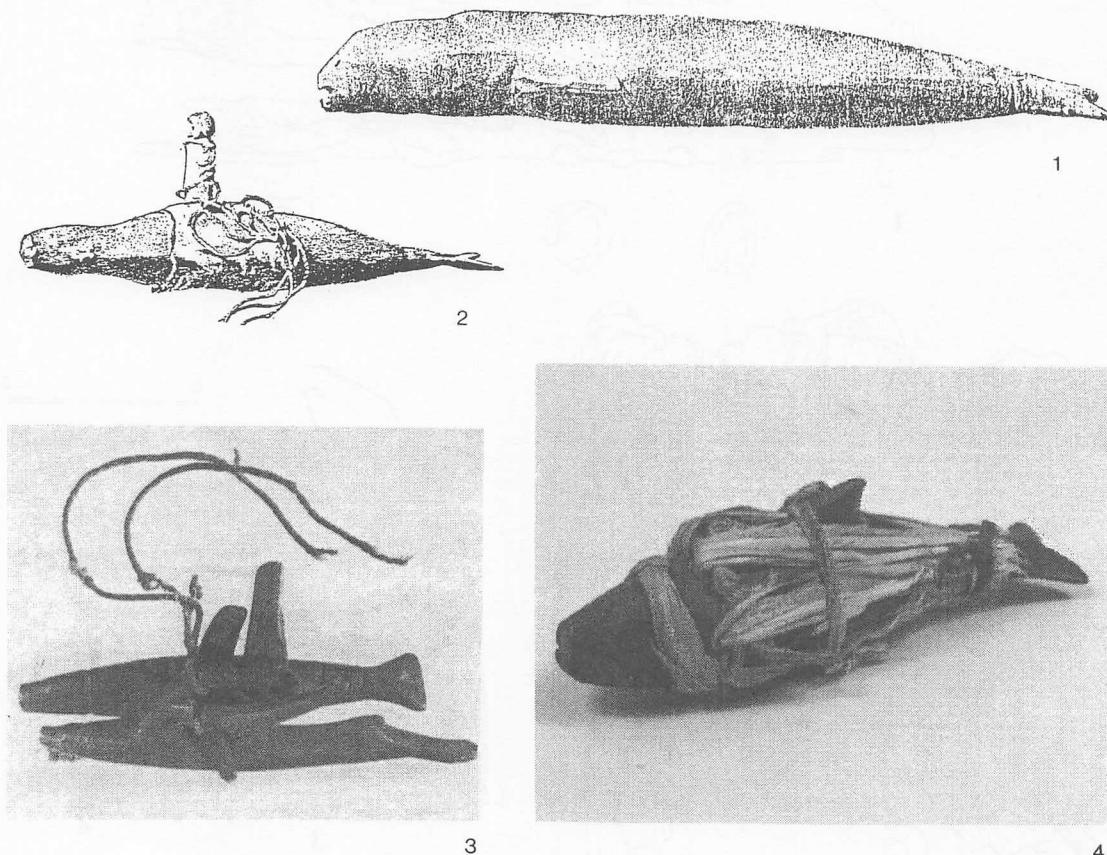
土製品



図V-5 日本近海のイルカ(柏屋1980b)と動物形土製品



図V-6 オホーツク文化のクジラを表現した遺物 (1~4: 1/2 5~10: 1/1)



図V-7 民族資料にみるシャチの造形

形土製品はイノシシ、クマ、イヌ、サルなど陸上動物を表現したものが多く、水生動物ではカメを表現したものがみられるだけである（江坂 1974）。また、土器の把手や絵画などを含めても水生動物を表現したものは少ない。従って、本土製品は縄文人の造形世界の枠を広げたと同時に、シャチに関する精神世界の存在を裏付ける資料といえる。

アイヌ文化
のシャチ

シャチを表現した民族資料として、魔除け、お守り、豊漁祈願具などの木製の造形があることはすでに紹介したが、それらの背景にはいずれもシャチを尊ぶ精神世界の存在がある。例えばアイヌ文化において、シャチは鯨を惠んでくれる神様で、「トマリ・コル・カムイ」（入江を支配する神様）、「アツイ・コル・カムイ」（海を支配する神様）、「レブン・カムイ」あるいは「レボルン・カムイ」（沖の神様）、「カムイ・チシ」（神様の舟）、「チオハヤク」（我等が恐れ、かしこむ神様）、「イソ・ヤンケ・カムイ」（海幸を浜へ上げる神様）などと呼ばれ、海岸の岩や崖や岬の上などにその祭壇を設けて、古くは「鯨祭」などを行つたらしい、という（知里 1954），一般には「レブンカムイ」（沖の神）と呼ばれることが多く、山の神である熊と対峙され、ユーカラではシャチの男性は多感で、やさしい心情の持ち主として描かれが多いらしい（萩中 1980）。

レブンカムイ

イルカ獵
海獣狩獵

北海道の縄文時代におけるイルカ獵は、道東部や噴火湾を中心に積極的に行われ（西本 1984），特に噴火湾では縄文時代以降近世に至るまで、オットセイやイルカ、クジラを対象とした海獣狩獵の伝統が維持されていた、という（西本 1985）。しかし、シャチの遺存体の検出はほとんどなく、積極的に狩獵対象とはなっていない。それは、全国的な状況も同

様でまれに大型の歯が検出され、垂飾品に利用されている場合がある、という（金子・忍沢 1986）。シャチが積極的に捕獲できないのは、その生態からみても当然のことと思われる。

一方、動物を介した縄文時代の狩猟儀礼は、早・前期の「小地域・集団の域を出ない豊猟願望」、中期の「他の様々の儀礼との重畠化」、後・晚期の「広範な地域で共通化」という展開を示し、さらに後・晚期はイノシシ形土製品祭祀、火を介在させる「送り」の儀礼の普遍化、下顎骨祭祀の出現がみられる、という（土肥 1985）。さらに、イノシシ形土製品は表現の特徴から「狩猟民共通の属性を集約化した土製品」（土肥 1985）で、「シカの中手・中足骨の選択的骨角狩猟具製作」と表裏一帯をなし、縄文時代の狩猟社会構造を特徴づけるものである、という（土肥 1981）。

おそらく、シャチ形土製品もイノシシ形土製品と同様な性格が考えられるが、シャチ形土製品は海をめぐる狩猟・漁撈活動に伴う儀礼と深く関連するものであろう。シャチはその生態から積極的な狩猟対象とは考えられないので、その土製品は海に生息するものすべてを象徴し、その背景には前述したアイヌ文化などと同様にシャチを重要視する習慣があったことが考えられる。イノシシ形土製品は、秋の狩猟シーズンの直前に製作され、屋外でその一部を欠く行為が行われた、という（土肥 1981）。シャチ形土製品も、欠損および破損した状態で出土し、土器や石器の破損品とともに住居跡の凹みに投棄されていた。従って、土製品の使用は、日常的に行われたものではなく、イノシシ形土製品と同様、単発的なものであった可能性が強い。さらに推定すれば、シャチ形土製品は、単にシャチ＝海の神様のみを表現したものでなく、「海の生きもの」を代表し、さらに「強さ」をも示しているものであろう。従って、シャチ形土製品による祭祀は、土肥氏のいう中期の狩猟儀礼の「重畠化」現象と関連し、単に豊猟祈願だけでなく、様々な他の儀礼（葬送・誕生・祖靈崇拜など）と結びついていた可能性がある。

また、シャチ形土製品がある種の儀礼に使用されたものであるとすれば、アイヌ文化の「イナウキケ」（削り掛けの房）（高倉 1969）や、ウイルタのお守り（図V-7-4）などにみられる飾りなどが付けられた可能性があり、土製品の噴気孔の後ろにある横一文字の沈線は、それらを固定する際の凹みではないか、と考えられる。

土製品は1点のみの出土であるが、「シャチ」と同定できたことによって、アイヌ文化や北東アジアの民族文化のシャチに関する意識や造形と比較することができた。その結果、縄文時代においても「シャチ」を重要視する観念が存在した可能性が考えられ、さらに、縄文人の豊かな造形能力を再確認することができた。また、民族資料は木製品であることから、縄文時代においても木製品の存在は予想されるが、土製品という材質の特徴は、土偶や土製仮面などの造形同様、縄文文化における土との親和性を示すものであろう。

狩猟儀礼

イノシシ形
土 製 品海をめぐる
儀 儀シャチ 形
土 製 品儀 重 署 の
札 畠 化

イナウキケ

土 と の
親 和 性

(長沼 孝)